

熊谷晋一郎(著)

《シリーズ ケアをひらく》 リハビリの夜

岩崎清隆

(群馬大准教授・作業療法士)

この本の著者は、脳性まひをもった小児科医である。この本には、著者の幼少時からの運動学習、モノや人への働きかけの学習のプロセスがある種の感慨をもって描かれている。感慨といっても独りよがりな情緒論に陥ることなく、全体が透徹した公平な視点に貫かれている。適切な内容に、それに見合う適切な言葉が用意周到に選ばれているので、味わい深いと同時にその描写がとても美しくも感じられる。

・きらりと光る表現

本書のコンセプトの一つに、セクシュアリティがある。「官能」「快楽」などドキッとするような表現があるが、「敗北の官能」など、「そうとしか表現できないだろうな」と思われるようなきらりと光る表現が随所にみられる。

非日常的な次元にわれわれの視点を向けるのに本書のイラストも有効である。はじめ少し不気味な気持ちを抱かせるようなイラストであるが、透徹した論理とともに軽みと遊びも同時にそこに用意されている。

脳の障害に由来する運動障害が、「身体内・身体外協調構造」という概念から説明されているが、著者の体験に裏打ちされた理解なので、とてもわかりやすい。感覚・運動コントロールシステムの最新の知見も踏まえて書かれているが、それらの紹介が巻末の注などにほどよく整理されているので、冗長にならずそれが文章の流れを遮ることはない。

・人間関係のあり方が動作を決める

リハビリの体験と、トイレ動作、注射の動作など新しい動作の学習のプロセスの記述は圧巻である。

著者は、これらの学習が促進されるかどうかの背景としての人間関係の在り方を指摘している。人が「ほ

どきつつ拾い合う関係」にある時のみ、運動学習が良き循環の中に進行していくという指摘は、著者でなければできない指摘であろう。反対に悪意はなかったとしても、運動学習が健常の規範に同化させるような著者のいう「まなざし/まなざされる関係」の中で行われると、決していい効果を生まないばかりか、治療者-被治療者関係が容易に「加害/被害関係」に移行しうる危険性が容易に想像される。これらの指摘は、発達障害の医療・教育・福祉に携わるすべての人々に有益である。

著者は「あとがき」の中で、2次障害を診察してくれた整形外科医の対応について触れている。これを読むとすべての医療・教育・福祉関係職種は、それを手がかりに、自らの臨床の場に患者、生徒との「ほどきつつ拾い合う関係」がどう実現されているか吟味したくなるのではないだろうか。

・多元的な視点が動きをひらく

「動きの誕生」の章では、脳性まひをもった人のモノや人との出会いと適応には、彼自身が健常者と自分自身の2つの異なる運動イメージをもつ必要があったことが述べられている。すべての医療・教育・福祉関係職種にとっても、そういう多元的な視点の獲得こそが、対象者との「ほどきつつ拾い合う関係」を築きあげる手がかりと思われる。

この著作からは、著者の透徹した目を感じると同時に、著者の人と世界に対しての信頼と、生きる上でのしぶとさ、粘り強さが感じ取れる。本著のタイトルが「リハビリの夜」とあるように、リハビリを受けた夜に感じた「敗北の官能」が、著者の学習の原動力になってきたからであろう。

ここに描かれている敗北、悲哀、希望は、運動障害をもった1人の医師の学習過程にとどまらず、人間の生き方の普遍的なモデルの一つのように見えてくる。

●A5判・264頁

定価 2,100 円(本体 2,000 円+税)

2009 年 医学書院・刊